

常楽寺の十三重塔

じょうらくじのじゅうさんじゅうとう



文化財愛護シンボルマーク

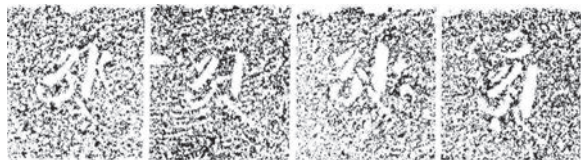
| | | | |
|----|-------------------------------|-------|-----------------------------|
| 名称 | 常楽寺の十三重塔 | 時代 | 鎌倉時代、14世紀(正中2(1325)年の可能性あり) |
| 別称 | 石造十三重塔、石造十一重塔、常楽寺の層塔 | 所在地 | 加古川市加古川町大野 1762 |
| 数量 | 1基 | 所有者 | 常楽寺 |
| 寸法 | 高 338cm(基礎底部から現存する十層目の笠の上部まで) | 指定 | 加古川市指定文化財 |
| 材質 | 石造、凝灰岩(竜山石)製 | 指定分類 | 建造物 |
| | | 指定名称 | 石造十三重塔 |
| | | 指定年月日 | 平成 29(2017)年 3月 2日 |



常楽寺の十三重塔

常楽寺本堂の東側に建つこの十三重塔は、加古川地域に多い鎌倉時代末期の優れた石造品群の中で典型となるもののひとつです。

凝灰岩（竜山石）製の層塔で、現在は十一重塔の姿をしていますが、初めは十三重塔として建立されていたと考えられています。塔身には、胎蔵界四仏の種子が陰刻されています。



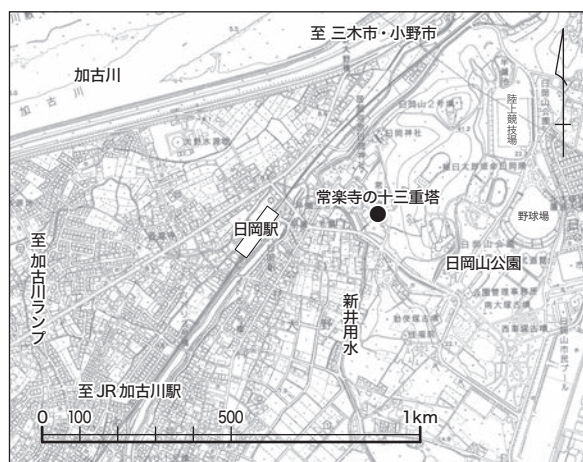
ア ク アン アー ア
塔身種子拓本

製作年代については、種子の表現や笠部の反りなど、層塔の形式は鎌倉時代後期のものと考えられます。また、塔身の種子「**ア**」（上部に奉籠孔がある面）の右側にある判読困難な銘文が、以前は「二年乙丑潤田月」と読むことができたと言われていたことから、銘文の干支と潤月の内容を考えて、正中二（1325）年乙丑 閏一月の建立の可能性が考えられています。

日岡山の南西にある常楽寺は、大化2（646）年に法道仙人が開き、僧文観（1278-1357）によって再興されたと伝えられています。『西大寺末寺帳』に播磨国の筆頭に記されているなど、中世の播磨を考えるうえでたいへん重要な寺院です。

常楽寺を復興した文観は、賀古荘北条郷大野の出身と考えられており、後醍醐天皇に重用され、醍醐寺座主や東寺長者として活躍した律僧で、真言僧でもありました。

常楽寺の境内には、県指定文化財で文観慈母塔と伝えられている正和4（1315）年銘の石造宝塔及び同時代の五輪塔2基が現存しています。



なお、この塔は、第一層、第十二層及び最上層の第十三層の笠部と相輪部が欠失し、現在の最上部の第十一層にあたる笠部と相輪部が別の石造品の部材が充てられたのではないかと考えられています。これにより、下から、基礎、塔身、現在の第一層から第十層までの笠の部分までが指定対象となっています。



十三重塔横にある板碑、石棺などの石造品
（拓本／『加古川市史第7巻』から転載、文・写真／宮本）

●参考文献

- 『加古郡誌』加古郡役所（1913年）
- 『加古川市内の石造遺品の調査報告書』永江幾久二、加古川市教育委員会（1962年）
- 『加古川市史 第7巻』加古川市（1986年）
- 「東播磨の中世石塔と文観」山川均（『奈良歴史研究 86号』、2016年）
- 「文化財ニュース 60号」加古川市教育委員会（2017年）
- 「印南野の中世雑考2 - 仮称「東播正和石塔群」を巡って -」金子哲『印南野文華 71号』（2017年）

●キーワード

建造物、石塔、十三重層塔、十一重塔、十一重層塔、常楽寺、宝生山常楽寺、大野常楽寺

●所在地／加古川市加古川町大野 1762

●交通／JR加古川線「日岡」駅から東北東へ徒歩5分車は加古川バイパス「加古川ランプ」から北へ2km